



大きく育て、たくさん実れ

前橋市立富士見中学校 1年 石田 萌葉

「やばい。こんな時間。なんで起こしてくれなかったの。朝練遅れる。」

起きてすぐ食卓へむかった。お母さんがご飯を食卓の上に置いた。いつものご飯だ。急いでご飯をかきこんだ。

「もういいや。行ってきます。」

「ちゃんと食べて行きなさい。」

お母さんの声を無視して、私はご飯を食べ残して急いで外に飛び出した。

友達といつもの坂道を自転車で登る。汗がじわじわとふきでてくる。朝練に遅れる。必死になって自転車をこいだ。いつものおじさんがいる。

「おはようございます。」

「おはよう。」

笑顔でおじさんが返してくれる。おじさんは毎日汗だくになって、稲を育てている。稲はもう私のももくらいまで大きくなっていて。

そういえば、中学校に入ったばかりの四月の頃は、まわりの景色なんか目に入らなかった。初めての校舎。初めての友達。初めての自転車通学。初めての部活動。初めての先輩。中学校生活は、初めてのことばかりでわくわくしていた。早く中学校に慣れようと夢中になっていた。必死に自転車をこいでいただけだった。五月になって、やっとまわりの風景も目に入るようになった。中学校生活にもすこし慣れたかな。自転車通学の朝、「代かき」をしているおじさんの姿に気がついた。田植えの準備だ。おじさんとあいさつを交わすようになったのもこの頃だ。でも、その頃になると、私も部活の練習時間もおそくなり、初めてのテストがあったり、中学校での生活もいろいろなことがいそがしくなっていた。友達との帰り道の会話も

「今日も疲れたね。」

そんな会話が多くなっていた。ゴールデンウィークの頃、おじさんが稲の苗を植えていた。田植えだ。稲の苗はまだたよりない。風が少し吹いただけでも飛んでいってしまいそうだった。夕日が田んぼの向こうで空を赤く染めている。とてもきれいだった。その景色を見て「明日もがんばろう」そんな気持ちになることができた。このたよりなさそうな稲の苗は、私と一緒になのかもしれない。

「大きく育て。」

心の中でさげんだ。

今、私の目の前で大きく育った稲を見て、そんなことを思い出した。

こうやって長い時間をかけて稲を育てていく。おじさんが、今朝も一生懸命に稲の世話をしている。おじさんが手塩にかけて稲を育てている。小さくたよりなかった稲の苗は、今は田んぼにすき間がないくらい大きく育っている。風に吹き飛ばされそうだったのに、今は楽しくおどるように風にゆれている。夏には太陽の日差しをたっぷり浴びて、大きくたくましく育っていくのだろう。今年の夏はとても暑いけれど、稲たちが成長していくのを見ながら、私もがんばろう。稲たちに負けないように。私も成長できるかな。きっと秋には、たくさんの稲穂が実っているだろう。

私ははっとした。私が今日食べ残したご飯は、こんなにも時間をかけて育ち、農家の人たちがこんなにも愛情を込めて作っていたのだ。そのお米が私の食卓のご飯になっている。私の今日を元気にするエネルギーになっている。そして、毎朝お母さんが早起きして作ってくれるご飯は、お母さんの愛情がたっぷり入っている。

「今日も一日がんばってね。」

そんなメッセージが込められているのだ。

だから、明日からは、早起きしよう。そして、残さずゆっくりご飯を食べよう。お米が食べられることに感謝して、お母さんとたくさん話をして、茶わんの中で白くきれいに光るお米を食べて、今日をがんばるエネルギーをもらおう。